
就 任 挨 拶

生物環境安全部長 岡 三 徳



本年4月1日付けで、生物環境安全部長に就任しました。独立法人化後の初年目を前職の植生研究グループ長として、研究推進に関わる考え方の整理や研究評価体制の整備等の各種規定の検討に参加し、忙しく過ごしました。また、植生及び組換え作物の環境影響評価の研究や植生研究会の開催には、グループメンバーとの討議を通じて生物環境安全性研究の意義を学ぶ1年でもありました。

最近、中国との共同研究推進のため、南京の土壤科学研究所を訪問する機会があり、上海から南京への車窓から眺める揚子江流域の水豊かな江南平野に、日本の水田風景のルーツを思い巡らしました。同じように、これまで私は熱帯農業研究に長く関わることで、多様な農業の風景をみる機会がありました。水の乏しい乾燥した中東や中央アジアの農業や湿潤な東南アジアやアマゾンの農業にみられる風景は、それぞれにその地域の気候や風土に適応して作られてきた農業の形といえるかもしれません。東南アジアの農業を取り上げても、北から山岳部、平原、デルタの農業、そしてインドネシアなど島嶼部の農業まで多様な農業の形をみることができます。

数年前に暮らしたミャンマの中央平原には、くり返す乾季と雨季、そして起伏のある地形に合わせて、土地と水を利用し、作物・品種を選び育てて暮らす人々の風景がありました。一方、雨が多く豊かなジャワ島では、高度な土地利用による集約型農業が発展し、水田を前にした山麓には、木々に囲まれた赤い瓦家の集落と里山の風景があります。

こうした熱帯各地域の農業の風景や特徴を思い

描く時、最近では長い時間をかけて形作り守られてきた農業の風景と形がくずれはじめ、これが環境の問題と深く関連していることを思い知らされます。熱帯に共通した土壌の劣化や侵食、水資源の不足、肥料や農薬等による環境汚染、植生や生物種の大幅な減少や消失など、さまざまな農業環境の問題が、今では各地域が抱える主要な研究課題となってきています。

生物環境安全部の研究には、その中期計画の中で、「人為的インパクトが生態系の生物相に及ぼす影響の評価」と「農業生態系の構造と機能の解明」の課題の下に、侵入・導入生物及び遺伝子組換え体の環境影響評価、生物間相互作用や生物多様性の解明を中心とした研究テーマが位置づけられています。国外の農業環境問題とも共通する広範な研究課題への取り組みには、遺伝子、物質、生物群集、生態系レベルからアプローチが重要ですが、実証的データとともに環境へのリスク評価や管理のための科学的な検定・評価手法の開発が求められています。とくに、組換え体の環境安全性評価の研究には、そのリスク評価や管理に加えて、クライアント（消費者、生産者、行政等）とのコミュニケーションを通じた Public acceptance や Accountability が重視されています。

また、組換え作物には、1960年から1970年代の緑の革命を経て、急激な人口増加に見合う食料確保の懸念から「第2の緑の革命」への期待が高まっています。しかし、今後の組換え作物の開発・導入には、農業生態系への深い理解とこれに基づく適正な管理技術が重要であることはいうまでもありません。

こうした遺伝子組換え体を含めた生物環境影響評価と安全性の研究推進には、当研究部の枠を越えた広範な専門分野との連携と協力が不可欠です。今後ともご支援とご協力をお願い致します。